

博士論文の要約／Summary of Doctoral Dissertation

氏 名 牧野 静

Name

学 位 論 文 題 目 宮沢賢治の思想 一仏教と家族観から一

Title

全文を公表できない理由 論文の全体を出版する予定があるため

Reasons why the full text of my dissertation cannot be disclosed on the Internet

書 名 (雑 誌 名) 宮沢賢治の思想 一仏教と家族観から一 (仮)

Name of magazines/journals

出 版 社 名 法蔵館

Name of the publishers

発 行 予 定 日 未定

Estimated date of issues/publications

所属 筑波大学大学院人文社会科学研究所 哲学・思想専攻

論文要約

宮沢賢治（一八九六～一九三三）。生前はほぼ無名でありながら、現代に至るまで強い支持を得て読み継がれている作家である。広く知られている作品に、『春と修羅』（一九二四）や「雨ニモマケズ」（生前未発表）、『注文の多い料理店』（一九二四）、『銀河鉄道の夜』（生前未発表）などがある。賢治の描いた物語は、舞台化、映画化、漫画化、絵本化、アニメ化、ゲーム化など、複数のメディア展開を遂げながら、読み継がれている。賢治のテキストにインスパイアされたことを明言している楽曲も、交響曲、ロック、ポップス、ヒップホップなど、幅広いジャンルに存在する。小説、ライトノベルなどの文芸作品にも、賢治を意識したものは多い。モチーフのレベルまで観測を広げるなら、賢治に影響を受けている創作物はあまりにも膨大である。宮沢賢治は、非常に多岐にわたって受容されているという点において、日本近代文学史上、他に類例をみない。

賢治の受容史の特徴に、賢治自身の生涯もまた、物語化され、語り継がれているというものがあつた。二〇一六年の生誕一二〇年を過ぎてなお、賢治の生涯の物語は、人々の強い関心の対象であり続けている。賢治の生涯は、常に献身に溢れるものとして描き出される。その対象は主に、農学校教師時代の教え子や、教師の職を辞して向き合おうとした、農民たちである。この献身的な賢治像は、二〇一一年の東日本大震災発生後にも、大きな注目を集めた。東北の生まれであり、農村という過酷な環境のために尽くそうとした賢治の姿が、被災者に

寄り添い、励ましようものとして、繰り返しメディアで取り上げられたのである。

賢治の受容史は、その聖人化、神話化と切り離せないものであるという指摘も、既になされている。しかし実際の賢治の思考には大きな特徴がある。賢治は常に、他者のことを考えている。向き合おうとする相手に対し、自分に出来ることがあれば、たとえ命を擲つことであっても、それをしようとさえ思う。それは聖人的なものと看做すことが出来る。しかし、賢治自身が信じるものをゆずる気は、一切ない。賢治は、いつもすかさず他界へと飛んでしまう視点のように、誰とでも共有できる訳ではない前提に立っているためである。

賢治の視点は、生きている相手、今そばにいる相手、向き合おうとする相手がありつつも、常に相手を飛び越え、他界、来生に向けられていく。そうして、それが正しく実らないにしろ、賢治の思いは激しく、いつも強く祈る。今生で叶わなければ「死ぬことの向ふ側」で、さらには来生で、賢治は自身の思いが実ることを祈る。そのような祈りは賢治の、例えば『銀河鉄道の夜』等に結実していく。賢治の生の過程で一つ一つのエピソードが持っていた意味は、その創作に織り込まれ、昇華され、読者の前に提示される。

実際の人々とのかかわりの中では実ることの難しかった賢治の祈りは、創作に託されることによって、輝きを帯び始める。賢治のやや奇矯な、やや異様な、激しいこだわりと他者への思い入れは、その創作上においてのみ、実を結んでゆく。祈り、呼びかけ、教え、問いかけるように、賢治は創作を展開していく。賢治の祈りは、時を経て、数多の受け手を得て、ひとつの大きな現象となり、読み継がれていくのである。

そのような賢治の思想形成の基盤として、既に定説となっているのは、彼が法華信仰を自認していたことと、「法華文学ノ創作」というメモが残されていることなどから、それが創作の動機と密接であった、ということである。ただし、その信仰の軌跡と内実とを追うことには、いくらか困難が伴う。賢治の生涯の信仰の軌跡には、大きく二つの要素がある。まず、賢治が生を受けた宮沢家は、真宗大谷派の篤信であったとされる。そして賢治は青年期に、法華経に出会い震えるような感動をしたのち、宮沢家の信仰をはなれ、田中智学（一八六一～一九三九）が主宰する新興の法華団体、国柱会へと改宗している。この二点は伝記的事実として、全集の年譜にも記されている。しかし、賢治の信仰について、先行論における見解は分かれている。賢治のテキストは、『銀河鉄道の夜』において、主人公のジョバンニが「どこまでもどこまでも一諸に行かう」と友人のカムパネルラに呼びかける場面などを引き合いに出しつつ、どこか読み手に寄り添ってくれるものとして読まれる傾向があり、論者の恣意を離れた解釈が非常に困難なためである。賢治を論じようとするときには、論者自身もまた、賢治が寄り添ってくれることを過度に期待していないか、常に自問するべきだろう。賢治と向き合う作業は、賢治の実像に迫ろうとするより、むしろ、論じようとする自分自身が、何に価値を見出そうとしているのかが、問い返され、照らし出されるものだともいえる。

本論文では基本的に、賢治の創作と信仰の関係は密接なものであり、その信仰は仏教のものであったという立場を取る。のちに詳しく扱うが、賢治が法華信仰を自認していたこと、及び創作と信仰とを結びつけていたであろう証左は、賢治自身のテキストに、看過できないレベルで遺されているためである。更に、その信仰の実態に迫るため、大きく二つの検証作

業を行う。一つは、賢治の生家である宮沢家の面々の信仰を、あらためて検討すること。もう一つは、賢治自身が影響を受けていたと思われるテキストと、賢治のテキストとの比較作業である。それらの検証を経て、いまいちど賢治の創作に立ち返り、その解釈を行う。

宮沢家が浄土真宗の篤信であったことは、伝記的事実として、幾度もなぞられている。しかし、その実態に踏み込んだ研究は、賢治の受容史上の問題もあり、限られている。そこで本論文では、宮沢家の面々の信仰に注目し、彼らの信仰を検証した上で、賢治が彼らをどう捉えたのかを考察していく。宮沢家の中でも得に重要なのが、賢治の父、宮沢政次郎（一八七四～一九五七）と、賢治の妹、宮沢トシ（一八九八～一九二二）である。政次郎は、清沢満之（一八六三～一九〇三）、暁鳥敏（一八七七～一九五四）、近角常観（一八七〇～一九四一）など、当時の革新的な真宗僧侶たちと交流を持ち、岩手に招き、積極的に教えを乞うていた。また、トシは、日本女子大学在学中に、近角常観の営む求道会館に通い、直接教えを受けたことがある。このような仏教者と接点を持っていた宮沢家の面々の信仰を扱い、それと賢治の信仰とを対比することで、宮沢賢治研究における新たな分析視角を用いると同時に、賢治を思想研究の対象として扱う意義を打ち出すことが、本論文のねらいである。

賢治の信仰についても、近代仏教研究の成果を反映する必要がある。少なくとも一時期、賢治は家出して上京し、鶯谷の国柱会館で働こうとするほど、田中智学に熱烈な信奉を捧げている。そして、この智学にかんする研究もまた、大きな進展を見せているためである。賢治が家族の存在を踏まえ、智学から影響を受けつつ行っていく創作について、智学のテキストとの比較を行いながら分析するのが、本論文のもうひとつの重要な作業である。

賢治がやや異様な態度で繰り返していく創作が、やがて人々の心を打つものとして結実していく過程には、賢治が家族と向き合おうとしたことと、賢治自身の仏教の信仰が、大きく影響しているというのが、本論文で示そうとする筋書きである。

第一章「宮沢政次郎と賢治の改宗」では、賢治の父親である政次郎の信仰を踏まえた上で、賢治の改宗問題を検討する。賢治の改宗は非常によく知られた話であると同時に、扱いが難しい問題でもある。賢治の信仰を検討する際に、読み手は「そうあってほしい」という賢治像を常に読み込もうとするきらいがあり、読み手の恣意を離れての検討に困難が伴うためである。本章では、少なくとも伝記的事実である、賢治が真宗大谷派の篤信であった宮沢家に生を受けたこと、及び田中智学が主催する国柱会へと改宗したことを、まずは大前提とする。その上で、賢治が智学から影響を受けつつ、真宗に批判的な視点を持った創作を行っていくが、やがて挫折していく過程を追う。

賢治はその童話創作の最初期の作品である『蜘蛛となめくちと狸』において、智学に影響を受けながら真宗批判を行っている。狸は僧侶の姿をしており、助けを求めてきた他の生き物に念仏のようなものを唱えさせ、騙して食ってしまうという登場人物である。選んだ動物が狸である点など、智学のテキストとの類似点が指摘できる筋書きである。ただし、智学の真宗批判は肉食の点にはなく、肉食から真宗を批判したいとするのは賢治のオリジナルな視点である。

また、賢治が改宗の際に激論を交わした父政次郎は、篤信ではあるが、僧侶ではない。賢

治の真宗批判は、宮沢家の信仰世界をそのままなぞったものではない。実際の政次郎は暁鳥敏などの当時の真宗の有名人を繰り返し岩手に招き、仏教講習会を開くほど熱心な信仰をもっていた。また対社会的実践にも力を入れており、『蜘蛛となめくちと狸』の狸とは重ねることが出来ない。

のちの賢治は真宗批判に失敗している。それは『ビヂテリアン大祭』に明らかである。この作品には、キリスト教国の出身でありながら本願寺派の門徒となった人物が登場し、釈尊や親鸞にならって肉食を行うと宣言し、物語の主人公を激怒させる。主人公は仏教の信仰に基づいて肉食を戒めるべきであると演説をする。ところが、その宣言を行った人物は喜劇役者であり、実際には肉食主義者であった。信仰と肉食をめぐる真摯な議論の応酬はそもそも成立しておらず、主人公が無気力に陥って物語は幕を閉じる。『蜘蛛となめくちと狸』にあらわれていたような、真宗批判を肉食の点から行うという試みは破綻している。

重要なのは、賢治がそれでも智学を選ぶということである。これに説明を与えるには、賢治と同時代を生きた多くの青年達に共通する課題を検討する必要がある。明治期から大正期にかけては、封建的な家の規範、親の精神的支配から逃れることと不可分に、個の覚醒、内面の覚醒を求め、家の信仰ではない信仰を選ぶ青年が、多くあらわれた時代である。中央の文壇からは距離があり、ともすれば東北にあらわれた孤高の天才であるかのように語られる賢治もまた、質屋という家業を継ごうとせず、東京へと出奔したことなどから、その時代の青年の多くが直面した問題に、葛藤していたと考えられる。

賢治の真宗への反発は智学の影響下でなされている。賢治は智学の真宗批判の枠組みに、自身の問題意識を重ねようとする。しかしそれは、宮沢家の家業や政次郎の信仰に対する批判を行う際に、必ずしも完璧に重ね合わせることが出来るものではない。智学を援用した批判が十二分に成功しているようには看做せないが、それでも賢治は智学を選ぶ。

政次郎が暁鳥と同様、花巻に招いて師事した近角は、東京で多くの青年たちを感化していたことが指摘されている。地方から出てきた青年たちの多くは、近角によって再編成された真宗の教えに新鮮なかたちで出会い、惹かれていった。ただし賢治やトシにとっては、岩田文明がいみじくも指摘するように、その再編成された教えが、まさに父政次郎から説かれるものであった。親の精神的支配から逃れることと、自身で信仰を選ぶことが不可分であるならば、トシや賢治が真宗を離れたのは、その文脈において必然だったのである。

第二章「宮沢トシの信仰―「我等と衆生と皆俱に」―」では、賢治の妹であるトシとその信仰に注目する。トシは賢治の創作に強い影響を与えた存在として、先行研究でもたびたび言及されてきた。ただし、それは賢治研究がメインであるゆえ、トシを従属的に扱うものにすぎず、トシ自身を信仰の主体として検討するものは非常に限られていた。トシを主体として行う検討は、大きく二つの意義がある。ひとつはトシから強い影響を受けていた賢治の信仰を解き明かす際の手がかりとして、もうひとつは、近代日本の宗教と女性、社会と女性を考える手がかりとしてである。日本の近代仏教史における登場人物は大半が男性であり、女性を信仰の主体として扱うものは非常に限られており、これから増やしていく必要がある。

トシは一八九八に生まれ、一九二二年に没している。このごく短い生涯に、トシは生涯尾

を引く恋愛事件を経験している。花巻高等女学校在学中のトシが音楽教師に好意を抱いていたことが、『岩手民報』で報じられてしまったのである。トシは酷く傷つきつつ、恋愛事件から立ち直るための人生の指針として「信仰」を求め続けたと書き綴っている。

トシは最初、父政次郎のすすめるまま、真宗の信仰を獲得するための努力を行う。具体的には近角常観の運営する求道会館に通い、近角の書籍も読み、それを書簡で近角に報告もする、という仕方である。しかしトシは信仰信仰を確信するに至らず、求道会館に通うのをやめてしまう。その後も信仰獲得に向け努力を続け、祖父に「同じ信仰」を抱くようにしたいという書簡を送っているが、結局確信には至らない。

トシはのちに発見者によって「自省録」と名付けられるノートを綴る。これは恋愛事件を反省しつつ、生きるための指針として信仰を獲得しようと努力したことを振り返り、最終的に抱いた宗教的理想、『法華経』の世界観についても述べたものである。トシは近角から一定の影響を受けると同時に、日本女子大学学長の成瀬仁蔵からも影響を受けており、信仰について思索を続けている。このノートの最後で、トシは『法華経』の世界観に憧れを抱いていると述べ、その宗教的理想を「仕事」にあらわしていく決意も記している。

トシが宗教的理想を「仕事」にあらわそうと決意したことには、恋愛事件とそこから立ち直るための「信仰獲得」という課題が密接にかかわっている。トシは宗教的な救済を求めると同時に、恋愛事件の汚名をそそぐために、立身出世を果たす必要があると考えていたためである。しかし、トシが触れ得た範囲での真宗僧侶の言説は、女性の宗教的救済像を家庭における主婦のそれと重ねるものであった。つまり立身出世を果たしつつ宗教的に救済される女性のロールモデルは、真宗の言説の中では展開されていなかった。それゆえトシの葛藤は続き、最終的には真宗の信仰をはなれ、法華信仰へと惹かれていったと考えられるのである。

このトシという存在を、賢治がどのように受け止め、解釈していったかを検討することも、今後の課題である。トシが信仰と進路をめぐる葛藤を続けたのは、賢治が進路に悩みながら法華経へと傾倒していった時期とも重なっており、トシの葛藤が賢治に影響を与えた可能性も、十分に検討する必要がある。

また、トシと賢治の発想には似たところがある。トシにとっての法華信仰は、個人的な恋愛感情の否定を経て、「皆」を祈るものである。賢治も『春と修羅 第一集』における「小岩井農場パート九」において、恋愛の否定を経て宗教情操に至り、「皆」を祈ろうとしている。この兄妹の影響関係にはまだ検討可能な要素が残されている。

いずれにせよ、トシは単に創作者宮沢賢治にとっての夭折した妹というモチーフに留まらない。トシという存在は、近代日本の宗教と女性、社会と女性を考察する際の、重要な手がかりとなるだろう。

第三章「トシをめぐる追善」では、妹トシの死を賢治がどのように受け止め、創作にあらわしていったのかを検討する。

賢治によるトシをめぐる追善は、国柱会の典礼を遵守しようとする行動と、トシの死後の行方を創作上で問うものの、大きく二つに分けられる。賢治はトシを亡くした際、やや奇矯

な行動を取っている。トシの通夜や葬儀に参加しなかったり、トシの遺体が火葬される際にあらわれ、ひとりで題目を唱え続けたりしたのである。これらの賢治の行動は国柱会の典礼を定めた『妙行正軌』に基づいたものである。国柱会は他宗の儀礼への参加を禁じる等しており、賢治のやや奇矯な行動の根拠は、この『妙行正軌』にもとめることができる。ただし賢治は『妙行正軌』に基づいた行動だけではトシの死後の行方を確信するに至らない。

しかしその後も賢治はトシの追善を意図した創作を続けている。賢治は『日蓮聖人御遺文』における追善にまつわる記述や転生観に影響を受けつつ、トシが死後上位転生を果たすことを祈るような創作を繰り返す。『春と修羅 第一集』に収録された挽歌群や、兄が弟の追善を行おうとする『ひかりの素足』という童話などがそれである。しかし、『春と修羅 第一集』においても、賢治はトシの死後の行方を確信するに至らない。『ひかりの素足』は、賢治自身の手によって「おそらくは不可」の書き込みを添えられ、生前未発表に終わる。

最終的に賢治はトシが畜生道へと下位転生を果たした可能性に言及する〔手紙四〕という手紙形式の童話を近隣に配り歩く。これは死後カエルへと転生した妹をそれと知らず殺してしまった兄が、「すべてのいきもののほんたうの幸福」を追い求めなければならないとする筋書きである。『妙行正軌』には「追善」として「教書」を施すよう定めた箇所もあり、トシの転生先を追い求める創作は、それを配り歩くという行為までも含めて、トシの追善であったと考えられるのである。

なお、賢治がトシは下位転生を果たすと考えたのは、女人成仏（往生）の問題を意識したためであった可能性もある。〔手紙二〕という作品では賢治は娼婦を主題としており、なんらか女性と仏教と成仏について葛藤した痕跡が見受けられるためである。

賢治は、畜生に転生してしまったかも知れないトシをも救うためにこそ、「すべてのいきもののほんたうの幸福」を、追い求めるべき理想とし、トシが畜生になってしまったのなら、畜生ごと救えばいいという結論を、一旦は提示していると考えられるのである。

第四章「宮沢賢治の菜食主義—田中智学との比較から—」では、賢治が「すべての生きもののほんたうの幸」の実現のため、殺生と肉食を避ける方法として菜食に注目していたことを扱う。賢治の着想のもとを探るため、田中智学のテキストにも注目する。さらに、賢治の菜食主義には仏教が前提とする輪廻思想が反映されていることも確認する。

賢治が自らの意志で肉食を断つのは、法華信仰に入った後のことである。一九一八年頃の賢治は、屠殺される豚やまぐろの刺身に対し想像力をはたらかせ、豚の目にうつる景色やまぐろの霊の見る景色について綴っている。その際賢治は輪廻思想へも言及している。賢治にとって輪廻は、具体的なイメージを伴うリアリティのあるものである。

賢治の生涯にわたって、殺生と肉食は創作上の主題であり続けた。殺生と肉食への忌避感をあらわした作品は枚挙に暇がないが、その中でも特に輪廻思想への強いコミットを示したものとして、主人公がカエルに転生した最愛の妹を、それと知らず打ち殺してしまう〔手紙四〕『ビヂテリアン大祭』などがある。

このような創作を行うに至る前段階に、賢治は智学の言説から強い影響を受けている。特に、智学の『本化妙宗式目講義録』全五巻（のち『日蓮主義教学大観』、以下『大観』と略）

や、『日本国体の研究』からは、賢治の創作上の主題や主張とかなり似通った点を抽出できる。賢治は前者からは肉食の残酷さと菜食の素晴らしさ、それが世界に広めるべき仏教の価値観であることを継承しつつ、『ビヂテリアン大祭』をあらわしている。ただし賢治と智学には大きな違いがあり、それは肉食の残酷さを強調する際、輪廻に言及を行うか否かという点である。賢治は殺生の忌避のために輪廻を強調するが、智学は少なくとも殺生の忌避のためには輪廻思想に言及しない。

『日本国体の研究』からは、「食の靈化」と「物質の超越」の点で影響を受けていると考えられる。『日本国体の研究』は、「日本国体」は争いのない「道」であり、世界が見習うべき模範として研究すべきであるという智学の主張が述べられたものである。人間の争いの根本には「食」があり、それを克服するには「食の靈化」が肝要であり、人間は「物質を超越した一種の靈妙能力」を持つのだとしている。

このような智学の主張は、賢治が『注文の多い料理店』（一九二四年）の序文において、「氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風を食べ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむこと」が出来ると述べたり、賢治の描く「小さなものがたりの幾きれか」が、「すきとおったほんとうのたべもの」になることを願ったりしている。『注文の多い料理店』は、『鳥の北斗七星』等の食をめぐる争いをテーマに持つ作品を収めている。それを踏まえると、序文の「すきとほつたほんたうの食べ物」は、やはり「食の靈化」によって、「食」をめぐる争いを回避しようという智学の主張を、賢治なりに解釈し、再構成したものであると考えられるのである。

このような問題意識を持った創作が、賢治の妹トシの死の前後から行われていることにも注目したい。賢治はトシの死後の行方に確信を抱いていなかった。先の章では、それが賢治の女人成仏観（往生観）によるものであり、賢治が（畜生道に堕ちているかも知れない）トシの死後の行方を祈るために、「すべてのいきもののほんたうの幸福」を目指そうとしたという仮説を提示した。それを受け、この章では、賢治が実際に殺生の問題を乗り越えるため、菜食や「食の靈化」を創作の主題としていくことを検証した。賢治が智学から枠組みを借りつつ行う創作は、このような葛藤を経て、「すべてのいきもののほんたうの幸福」を主題とするものへと変化していったのである。

第五章「宮沢賢治の菜食主義—同時代との比較から—」では、賢治が菜食を行おうとした近代日本における、肉食と菜食をめぐる諸言説を確認する。この作業を通じ、賢治の菜食に対する動機や意図、構想を、近代の枠組みの中で捉え直すことを、この章の目的とする。その際、賢治研究ではあまり主立って注目されることの少ない、賢治と賢治の母イチの接点も確認する。

賢治が生きた近代に、菜食はどのように論じられていたのだろうか。一八七一年（明治四年）に宮中において肉食が解禁されたことに象徴されるように、西洋文化を積極的に取り込もうとする「文明開化」は、食生活の大きな変容をもたらしている。肉食の受容は宗教思想とも無関係ではなく、例えば一八七二年（明治五年）の「自今僧侶肉食妻帯蓄髮等可為勝手事」（今より僧侶の肉食・妻帯・蓄髮等勝手たるべき事）の布告は、仏教界に強い衝撃

を与えている。肉を喫することが普及していく時代に、そのカウンターとして、菜食に対する積極的な意義づけが、各方面から行われるようになった。賢治が入会した国柱会の主催であり、在家主義の立場をとった田中智学（一八六一～一九三九）も、「仏教僧侶肉妻論」（一八九一）などをあらわすことにより、仏教者にとっての肉食の位置づけを行おうと、繰り返し試みていく。賢治が菜食を選び取ろうとし、それを創作上にもあらわそうと試みたのは、このような背景を持つ時代である。

日本の近代における肉食の普及は、流入する西洋文明の象徴として、また西洋に追いつこうという戦略の一環として、捉えられてもいた。それに対し、神道や仏教など、宗教界の一部から強い反発が起こる。また、科学的な思考に基づいて、菜食の有用性を説こうとする言説もあらわれる。近代における食にまつわる言説には、肉食対菜食という対立項に、西洋対東洋の構図が重ねられ、意識されている。さらに、食の問題は、国民意識、民族意識ともかかわっていく問題である。その例として、賢治が一時期熱烈に信奉した田中智学と、智学の国柱会とかかわっていた、フランス人神学博士、ポール・リシャール（Paul Richard, 1874-1967）による、菜食にまつわる言説を挙げることが出来る。西洋人であるリシャールが、インドを経て滞在した日本において、菜食を主題化したことには、先の節で扱ったような、西洋対東洋、肉食対菜食の構図を、いまいちど見出すことができる。そして、リシャールが『告日本国』をあらわした人物であることも併せると、西洋対東洋、肉食対菜食の構図に、物質文明対精神性（霊性）の構図も、重ねうるものとなっていることが看取できる。

賢治もまた、そのような時代に菜食の実践を試み、また創作にあらわしていった。賢治は自身の肉食の忌避と菜食の動機を仏教の信仰にもとめている。ただし、賢治が接した言説は仏教のものに限らない。例えば「雨ニモマケズ」が書かれたのは、最晩年の病臥中、一九三一年頃だが、この頃賢治は母イチ（一八七七～一九六三）のすすめにより三年にわたり玄米を食べさせられ続けている。「玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲ食べ」という着想のもと、脚気を防ぐにはビタミンが効果的であり、それは玄米に多く含まれると明らかになった時代背景を参照しておく必要もある。

「雨ニモマケズ」は、死期を悟った賢治による、病臥中の祈りである。「雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ」、東西南北の人々のために奔走し、田畑のためにおろおろ歩き、涙を流したいと願った賢治は、まずは病に倒れない、強壯な、「丈夫ナカラダ」を願ったのだろう。

賢治の菜食の動機は、仏教の信仰（殺生戒）にはじまり、近代的な問題意識である、肉食の西洋と菜食の東洋の対立、科学の発展に伴う栄養学の成立とも接点を持ちつつ、最晩年にいまいちど、宗教的な祈りへと立ち返る。「玄米四合」は、利他行を可能とする、健康な体への願いのあらわれである。賢治にとっての信仰と科学は、近代という時代に、菜食という一つの結節点を得ていたのである。

この章の最後に、もう一点、確認しておきたいことがある。賢治研究において、母イチが主題となることはほぼない。しかし、賢治の代名詞ともいえるほどの知名度を誇るようになった「雨ニモマケズ」における「玄米四合」は、賢治の健康を願うイチの要望を、幾らか反

映したのもであった。賢治はかつて、父や妹と、賢治自身の信仰を軸とし、杵としながら、向き合おうとしてきた。そうして最晩年が近づいた時期に、賢治はその信仰とも接点を持ちうる仕方で、玄米食を取り入れるという方法で、母ともまた、向き合おうとしていたのである。

第六章「関東大震災と『銀河鉄道の夜』」では、賢治がトシの死を受け、「すべての生きもののほんたうの幸」を、創作上で希求するに至る過程を追ったことを踏まえ、賢治が創作上であらわした理想を探る。具体的には、賢治の問題意識が現実の出来事とも接点を持ち、創作へと結びついていく過程を、一九二三年九月一日に発生した関東大震災から考察していく。

『銀河鉄道の夜』は、震災の翌年である一九二四年から一九三一年にかけて繰り返し手入れが行われた作品である。原稿の一部は、震災被災者への見舞い下書きの裏面を使用している。関東大震災と賢治の関連を指摘した先行論には、花巻にも被災者が避難しており、賢治がそれを目撃した可能性を指摘した栗原敦のものと、賢治が国柱会を通じて多額の義捐金を送付していたことを指摘する上田哲のもの、賢治が義捐金の送付をしたことを踏まえた上で、その後の智学の政治活動にはかかわっていないことを指摘する、大谷栄一のものなどがある。賢治は震災後、何らかの使命感を抱いているように見受けられる。これらの使命感が創作と結びついていく過程を検証するのが、この章の目的である。

そもそも、賢治の創作の動機は、最初から賢治の法華信仰、田中智学との出会いと密接にかかわるものであった。賢治が初めて『法華経』に触れるのは、一九一四年九月頃である。賢治は父政次郎の法友高橋勘太郎から送られてきた島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華経』を読んで「異常な」感動を受けたとされている。

その後、賢治は智学のテキストから影響を受けつつ、創作を行うようになる。賢治は一九二〇年に国柱会に入会する。翌一九二一年一月二三日には突如出奔・上京し、鶯谷の国柱会館に直行する。その際、対応した高知尾智耀から、「純粹の信仰がにじみ出る」ような創作を行うよう助言され、賢治は一ヶ月に三千枚とも云われる猛烈なペースで創作に励んでいく。

賢治は智学のあらわした『日蓮主義教学大観』を五回は通読したとされている。当然、智学が「世間救済」を強調しつつ「教化芸術」を提唱していたことも知っていただろう。以上から、賢治は「世間救済」のための「教化芸術」として、「純粹の信仰がにじみ出る」ような創作を行おうと考えたと推測できる。

関東大震災が発生したのは、トシが亡くなった翌年の一九二三年九月一日である。そして、『春と修羅 第一集』には、トシを悼む一連の挽歌群の直後に収められた「風景とオルゴール」の章には、関東大震災に言及するものが二篇ある。それは「一九二三、九、一六」の日付を附された「宗教風の恋」と「〔昂〕」である。「宗教風の恋」には「東京の避難者」たちへの言及がみられ、「〔昂〕」には、「東京はいま生きるか死ぬかの堺なのだ」という記述がみられる。震災に対する危機感が、トシの死のみを悲しみ続けることの戒めとなっていく様子が読み取れる。

賢治が震災に際し使命感を抱いた根拠として、信奉する日蓮の事跡を思い起こしていた可能性も指摘できる。歴史・社会的危機意識が天変地異を機に一気に宗教的使命感の確信にまで高揚することはしばしばあることだが、日蓮の場合も正嘉元年（一二五七年）八月二三日の鎌倉の大地震に触発され、うちつづく「非時ノ大風飢饉大疫癘大兵乱」（『災難對治鈔』）の災厄に確信を深めて、『立正安国論』の執筆、幕府諫言へと昇りつめていったのである。大地震を国難と捉え、使命感に衝き動かされていく日蓮の姿を思い描くことで、賢治自身も震災に際し何らかの使命感を抱き、その端緒を先の二篇に示したのだと考えられるのである。賢治とほぼ同時代を生き、国柱会会員であった石原莞爾（一八八九～一九四九）もまた、関東大震災の起きた宗教的意味について、考えを巡らせている。

そうして、震災を契機とする賢治の宗教的使命感は、賢治が文学を通じて示そうとした、「みんなのほんたうのさいはい」のかたちの模索に結び付いていったと考えられる。「たつたひとり」を祈ってはならないという自戒が、震災に際して宗教的使命感と重なったとき、おそらく賢治は大量死に思いを馳せている。そして、『銀河鉄道の夜』は、複数の死者が登場する物語でもある。タイタニック号の犠牲者を思わせる、家庭教師の青年と幼い姉弟や、主人公ジョバンニの友人、カムパネルラなど、ジョバンニが宇宙空間を共に旅する人々は、既に命を落としている。『銀河鉄道の夜』以前の『春と修羅 第一集』や『ひかりの素足』において賢治が扱ってきたのは、妹トシという具体的な個人や、兄が弟を追善する物語であり、ごく閉じた関係性のものであった。しかし『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニが向き合おうとする死者は、ジョバンニの肉親ではない。ジョバンニは死者たちとの交流を経て、「みんなのほんたうのさいはい」を希求しようと決意するに至るのである。

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災後、被災地となった東北の出身である賢治は大きな注目を集め、各種メディアに取り上げられた。東北という冷害等に苛まれる過酷な環境において人々の暮らしぶりの改善を願い活動した賢治の言葉は、被災者や復興を担う人々への励ましとなるよう引用された。いつも正しく人を祈ることが出来ず、また、「たつたひとりをいのつてはいけない」と苦しんだ賢治の祈りは、時を経て、被災者に寄り添うものとして、言及されるようになったのである。

第七章「『銀河鉄道の夜』における他者」では、この『銀河鉄道の夜』という作品が未完に終わったのは、賢治が創作上で自身の信仰を貫こうとすると同時に、共に在りたいと願う他者の姿を捉えようと葛藤し続けたためであるという読みを行う。

この作品のおおまかなあらすじは、孤独な少年ジョバンニが級友カムパネルラと共に銀河を走る鉄道で旅をしたのちひとり地上に帰還し、先程まで一緒にいた筈のカムパネルラの死を知らされるといものである。非常に高い人気を誇る『銀河鉄道の夜』が、実は生前未発表、未完のまま、断片的な草稿のみ遺されたものであったことは、一般にはあまり知られていない。『銀河鉄道の夜』の最終形である第四次稿は、賢治のそれ以前の創作とは幾らか異なる性格を持つ。それは賢治が、布教の手段としての創作から、純粋に信仰を表現するための創作へと移行していくためである。その理由を考える際には、賢治が実際に関わりをもった人々のことを思い起こすべきだろう。

賢治の生涯において、見落とすことの出来ない存在がある。盛岡高等農林時代の親友である、保阪嘉内である。賢治は保阪に非常に強い思い入れを抱き、国柱会に入会するよう激的な勧誘を行う。しかし、保阪が国柱会に入会することはなかった。賢治は教化に失敗した。このような現実の複雑さと困難さは、賢治の創作にも反映されていく。それはこの章で扱う『銀河鉄道の夜』からも読み取れる。

例えば、この作品における「鳥捕り」という人物の造形には、殺生を行いながら生きていく者を受容する為の仕掛けが施されている。しかし、それは同時に、殺生を行わずには生きられないという問題の解決の困難さを示している。家庭教師の青年たち一行は、ジョバンニが信じるのとはおそらく異なる神様を信じており、先に銀河鉄道を下車してしまう。主人公ジョバンニの友人であり、そのモデルが保阪であるともトシであるともいわれるカムパネラも、無言で姿を消してしまい、どこまでも一緒に行ってほしいというジョバンニの願いを聞き届けてはくれない。そもそも、この物語が鳥捕りによって「不確かな幻想第四次」と形容される幻想空間を舞台にしていることが、それぞれの問題の解決の困難さを示しているのである。

『銀河鉄道の夜』は、教化の行き詰まりを反映すると同時に、それでもなお篤い賢治の法華信仰をあらわすものでもある。作品上の重要なモチーフに、ジョバンニがいつの間にか所持していた切符がある。この切符は日蓮の曼荼羅を思わせるものであり、「ほんたうの天上にだって行ける」「どこまでも行ける」ものだとされ、明らかに他の乗客の切符より上位に置かれている。法華信仰を持つ者であることを示す曼荼羅が「どこまでも行ける」切符であり、ジョバンニがそれを所持していたことは、この『銀河鉄道の夜』において、賢治が自身の信仰を表明した証左である。

折伏的な態度を示すことでは現実の困難さを解決できないことを、賢治は既に知っている。賢治の法華信仰があまりにも篤いものであったゆえに、物語の性格は分裂している。それは他者と折り合いたいという願いとは引き裂かれたかたちで、彼の法華信仰が姿をのぞかせている為なのである。

『銀河鉄道の夜』には、他者の在りようを受け入れようとした重層構造が仕掛けられ、そのどれもが十全に実らないまま、結末へと畳みかけられている。ただし、この作品にはもうひとつ、異なる位相において、他者を受容しようとした試みが仕掛けられている。それは、第三次稿までは物語の種明かしを担うブルカニロ博士という人物が登場し、最終稿ではこの人物が種明かしごと削除されているという点である。作品の主題が、教化から、解釈を読み手にゆだねるものへと改稿されたのは、まだ見ぬ未来の読者にテキストの解釈を委ねるという祈りだったと解釈することが出来るのである。

第八章「賢治童話における自己犠牲—グスコブドリからグスコブドリへ—」では、仏教の信仰から思考の枠を組み上げ、家族と向き合おうとし続けてきた賢治が、その最晩年の童話作品である『グスコブドリの伝記』において、ひとつの帰着点を見出していたという考察を行う。

賢治の童話で、繰り返し主題となるものがある。自己犠牲である。第六章、第七章で扱っ

た『銀河鉄道の夜』における主人公ジョバンニは、「僕はもう〔中略〕ほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない。」という。『銀河鉄道の夜』には、救命ボートの定員を悟り、他の乗客に救命ボートを譲り、溺死することを選んだ家庭教師の青年や、川に落ちた級友を助けるかわりに自分は溺死したカムパネルラなど、自らの命を賭して他者の命を救うことを選んだ死者が登場する。ジョバンニは彼らと共に銀河を旅するうちに、先述の決意を抱くに至る。

誰かの命を救うために、自らの命を擲つというテーマは、『グスコブドリの伝記』という童話でも主題化されている。賢治が没する前年である一九三二年に発表したこの物語は、冷害による飢饉から皆を守ろうと、気象を操作するための大規模な工作を行った際、主人公ブドリがその工作のために必然的に命を落とすというものである。

第八章は、賢治が最晩年に手掛けたものであり、数少ない生前発表作品でもある『グスコブドリの伝記』と、その先駆形である未発表の『グスコブドリの伝記』の二作品を比較・検討することで、賢治が自己犠牲を扱う創作においてあらわした境地を明らかにしようとするものである。

そもそも、賢治の創作には、初期から、自分のからだがなくなればいいという願望を抱く登場人物がいる。代表的なのは、『よだかの星』におけるよだかである。よだかは最初、自分が鷹に殺される運命を嘆き、次に自分も虫を殺して食べて生きていることを嘆き、空へと飛翔を繰り返し、そうしていつの間にか星へと転生を果たす。多くの先行論において、よだかには、殺生の忌避からの焼身願望があると指摘されている。そして、殺生の忌避という仕方ではなく、より直接的に誰かの命を救うために命を落とす人物が多く登場するのは、第六章、第七章で扱った『銀河鉄道の夜』である。この作品では、「みんなのほんたうのさいはい」を希求する決意、及びそれへの契機として自己犠牲を描いていることが読み取れる。ただし、『銀河鉄道の夜』は多様な他者の在りようを受容しようという願いと、賢治自身の法華信仰との折り合いがついていない作品でもある。

この章で扱う『グスコブドリの伝記』、及びその先駆形である『グスコブドリの伝記』も、主人公ブドリの自己犠牲により、イーハトーブが予測された冷害と飢饉を回避することが出来るという筋書きである。おおまかな展開はそのままに、更なる改稿が必要とされたのは、智学による「不惜身命」（『法華経』譬喩品第三の偈文）、および「身軽法重」の解釈から賢治が影響を受けたためだと考えられる。「不惜身命」は法の為、つまり法華経の受持の為の自己犠牲を奨励するものである。しかし「大法を重しと」する「身軽法重」の語において、無暗に命を捨ててはならないことが示されている。

グスコブドリがややファナティックに命を捨てようとする傾向を持ち、皆がその死を英雄視し悼むのに比べ、グスコブドリは比較的冷静であり、皆にその死を悼まれる描写もない。『グスコブドリの伝記』作中を通して重視されるのはブドリが皆にどう受け入れられたかではなく、ブドリのやり遂げた仕事が皆に何をもたらしたかなのである。『グスコブドリの伝記』から『グスコブドリの伝記』への改稿は、物語の主題を、ファナティックな不惜身命志向から、より現実の問題に即した仕事の遂行と、それによる皆の幸福の実現へと

変化させている。これは賢治は不惜身命に対する理解を、身軽法重の語を重ねることによって更新し、それゆえに、教えをより正確に反映する意図のもと、改稿を行ったからだと考えられる。

賢治はおそらく、祈りまた願い希求して已まない「みんなのほんたうのさいはい」が、皆がそのまま共に抱けるもの、共に在れる場所を措定することであると、『銀河鉄道の夜』執筆により気付きかけたのであろう。しかし賢治の強いこだわりと法華信仰は、『銀河鉄道の夜』を未完・未発表のままにさせ、更に『グスコブドリの伝記』と『グスコブドリの伝記』という、性格の異なる二人の主人公の物語を生み出したのである。

『グスコブドリの伝記』には、もうひとつ注目すべきところがある。それはこれが家族の物語でもあるという点である。ブドリは冷害のために家族を失う。父と母は飢饉に追い詰められて失踪し、そのまま命を落とす。妹ネリは人攫いに連れ去られる。そのブドリが、「たくさんのブドリのお父さんやお母さん」、「たくさんのブドリやネリ」が、凍えず、飢えない未来に向けて、尽力したのである。賢治は最晩年になって、ようやく、視点を他界へと飛ばさず、現世に引き据えた上で、家族が共に在れることを理想とした創作を行っているのである。仏教の信仰を枠に、家族と向き合おうとするところから、賢治の創作は始まった。そうしてこの『グスコブドリの伝記』において、賢治ははじめて、家族が共にある未来を祈る創作を行った。そしてそれも、おそらくは、命をかるんぜず、法を重んじるという仕方に更新された、賢治の法華信仰に基づくものなのである。

終章では、本論文を総括すると同時に、今後の展望を述べる。

本論文では、賢治が実生活で強い思い入れを持った人々と向き合おうとしてきた過程を追ってきた。その相手は、まずは父政次郎や妹トシという家族だった。家族と向き合おうとする際、賢治が思考の枠組みとして用いているのが、彼が自認する仏教の信仰、法華信仰である。そうして、その枠組みを用いて向き合おうとする相手は、「すべてのいきもの」、「みんな」へと拡張されていく。そうしてそののち、最晩年の童話である『グスコブドリの伝記』において、イーハトーブに暮らす人々の幸せと同時に家族が共にいられる未来のために尽力する主人公を描き出していることに注目し、賢治が仏教の信仰を通じて向き合おうとし続けた家族の問題に帰着点を見出しているという考察を行った。

賢治は、父親にしる妹にしる、まずは家族と向き合うときに智学から枠組みを借りようとしている。父親については、家業批判と殺生の忌避とを重ねた仕方であった。妹トシについては、追善の方法であった。そうして智学から借りた枠は、「みんな」へと拡張されていく。賢治が物語ろうとしたテキストには、絶えず家族や、家族以外にも、とても大事に思ったり、まるでうまくいかなかったりした人々の姿が透けているのである。

賢治の行動に漂う異様さや奇矯さは、おそらくは賢治が正しく人に興味を持つことが出来ない上に、思い込みの強い、激しい気質を持っていたことともかかわるだろう。それでも賢治は、常に自身の信仰の枠組みに照らして、人々と向き合おうとし続けた。そうして、その生涯を閉じつつある時期に、ようやく、すかさず他界へと飛ぶ視点を、人々が今生きているこの世界にとどめ、「すきとほつたほんたうのたべもの」ではなく、冬を暖かく乗り切る

ことのできる食べ物があるよう、祈ったのである。

賢治自身の祈りの言葉によって紡がれる作品世界は、祈ることが顕現せしめることそのままであるかのように構築される。そうして生み出された作品世界は、賢治にとっての理想郷の性格を持つ。賢治にとって信仰と同義であった「みんなのほんたうのさいはい」が、日常的には捉えられない次元で初めて実を結ぶことに望みを繋ぐ営みこそが、彼にとっての創作であったのである。